

第30回

平成27年度
熊本市PTA研究大会
報告書

ONKOCHISHIN

～それぞれの温故知新・新しい時代へ引き継いでいくもの～

平成27年11月28日（土）

熊本市PTA協議会

平成27年度 熊本市PTA研究大会

大会テーマ

「ONKOCHISHIN～それぞれの温故知新・新しい時代へ引き継いでいくもの～」

現代の子どもたちは、情報化社会において、多様な価値観に触れながら育っています。そして、私たちの子育ての方法や教育観も日々変容しています。

子どもたちが安心して伸び伸びと成長するために、この研究大会で、「人は、なぜ、何のために学ぶのか」その根本に立ち返り、私たちにとって大切なことは何かを考えることができたらと思います。

未来に向かって進化していくと同時に、過去から、忘れてはいけないことは何かを学び、それぞれの「温故知新」をあらためて考え方あいましょう。

1 期 日 平成27年11月28日（土） 13:00～16:00（受付12:15～）

2 場 所 熊本保健科学大学 全体会：アリーナ
第1分科会：1301講義室M 第2分科会：アリーナ
第3分科会：1300講義室L 第4分科会：1302講義室M

3 参加者 熊本市PTA会員（教職員・保護者） 約900名

4 日 程 (受付) 12:15～

(1) 開会行事 13:00～13:30

- ① 国歌斉唱
 - ② 主催者あいさつ 熊本市PTA協議会会長 緒方 玲子
 - ③ 来賓祝辞 熊本市教育長 岡 昭二 様
 - ④ 来賓紹介
- 来賓ご退席・会場設営 ————

(2) 全体講演 13:40～14:40

演題 「勉強するのは何のため？」～教育(の未来)をテツガクする！？～
講師 熊本大学 教育学部 講師 苦野一徳 氏

———— 会場移動・休憩 ————

(3) 分科会 (分科会ごとに終了解散) 15:00～16:00

第1分科会 「新しい教育のあり方」～ICT教育の現状と展望～
講師 熊本県立大学総合管理学部 准教授 小薗 和剛 氏

第2分科会 「人と生き合える人に育てるために」
講師 くまもと心理カウンセリングセンター 代表 岡崎 光洋 氏

第3分科会 「ネット社会をかしこく生きる・豊かに生きる」
～子どもたちに伝えたい7つの知恵～
講師 熊本県玉名市立玉名小学校 校長 戸田 俊文 氏

第4分科会 「食育が子どもの未来を拓く」～賢く元気な子を育てる！食環境～
講師 社会福祉法人喜育園 山東こども園 園長 村上 千幸 氏

全体講演

演題：「勉強するのは何のため？」～教育（の未来）をテツガクする！？～

講師：熊本大学教育学部 講師 苦野 一徳 氏

【講師紹介】



哲学者・教育学者。早稲田大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。現在、熊本大学教育学部講師。主な著書に、『どのような教育が「よい」教育か』（講談社選書メチエ）、『勉強するのは何のため？』（日本評論社）、『教育の力』（講談社現代新書）、『「自由」はいかに可能か』（NHKブックス）。NHK Eテレ「ニッポンのジレンマ」。日本テレビ「NexT」などにも出演。

【講演内容】

1時間という限られた時間の中、演題について著名哲学者のエピソードや先生のユーモアを交えながら、大変意義深い講演をしていただきました。概要は以下のとおりです。

『始めに』

去年の4月に熊本大学に赴任した。今後、熊本の教育関係者の方とこれからの教育について対話・議論を重ねていきたい。「学び」とは自身が能動的に動き、自分たちで掴み取っていくものと考えている。自身の大学の授業においても、黙ってノートをとるような講義はあまり行っていない。学生たちとの対話を重視する形式で進めている。一方的・受け身的な講義は聞いたことの8割位忘れてしまうものなので、今回の講演用にレジメを作成した。

『1 テツガクって何だ?』

⇒ものごとやモンダイの、1番大事なポイント（本質）を見抜く。

⇒そして、じゅあどうすればそのモンダイは解けるんだろうという“考え方”を出す。

（社会のテツガク、教育のテツガク、恋のテツガク・・・）

哲学という学問は、「意味がない」、「役に立たない」、「難しい言葉で考えていくもの」ではない。上記のとおり、物事・問題の本質を見抜き、こうすればもっと上手くいくという考え方を出していくための学問である。

『2 教育の考え方初步の初步』

⇒「一般化のワナ」にひつかからない。

教育を巡る議論には不毛なものが多く、シンポジウム等においても、それぞれの信念がぶつかり合うばかりで最終的な答えがほとんど出ない。その原因は、各々が自身の経験を基準としてしまう（＝一般化）ことにある。この「一般化のワナ」に引っかかると、議論は一般化の応酬となり行き着く先がなくなってしまう。そうならないために、それぞれが「自分の考え方を過度に一般化しすぎていな

いか？」と振り返ってみることが大切。

⇒「問い合わせのマジック」に陥らない。

人間は、「あちらとこちら、どちらの考え方が正しいか？」と問われた場合、どちらかが正しい答えであると錯覚してしまうもの。これは根深い問題であり、このマジックは学問の世界においても見かける。ディベート方式は「問い合わせのマジック」の癖をつけ易い。大切なことはどちらが積極的、論理的ではなく、皆がなるべく納得できる考え方を探すこと。それが現実的、哲学的な考え方であり、建設的でポジティブな議論につながる。そうすることで教育に対する議論がさらに深まると考えている。

『3 なんで勉強しなくちゃいけないの？』

⇒「絶対に正しい答え」というのはない・・・でも・・・。

⇒カントの知恵「人間は究極の問い合わせには答えられない！」

ドイツの哲学者カントは、「皆空を見て青いと言う。しかし、私が見ている空の青さと、他人が見ている空の青さは同じであろうか？」と問い合わせた。答えは（自分は他人ではないから）絶対にわからない。人は究極的な問い合わせには答えられないことを証明した。

当時のヨーロッパは、「どの神が、誰の信仰が正しいのか？」を巡り宗教戦争が激しかったが、やがて人々は誰もわからない真実を巡って殺し合いを続ける愚かさに気付く。お互いの信仰を認め合うという考え方に行き着いた。大切なことは、絶対正しい答え=絶対的真理というものは存在しないが、皆がここまでなら納得できるという考え方を探ること。

⇒ニーチェの知恵「生きていることの絶対の意味なんてない。でも・・・！」

ドイツの哲学者ニーチェは、自身の悲しい体験（恋した女性をたった一人の友人に奪われた）を基に、人生を生きる絶対的な意味はないが、「これが生きている意味なんだ！」と感じる瞬間があることに気付く。世界が同じことの繰り返し（永遠回帰の思想）であったとして、人生が不幸の連続であつたとしても、たった一瞬でも「これが人生の喜びなんだ！」と感じることができれば、永遠回帰にも耐えられると説いた。

⇒自由に生きたい！

勉強する理由を一言でいうと自由になるため。人は自分が生きたいように生きるために学ぶ。ドイツの哲学者ヘーゲルも、「人間の欲望の本質は自由である」と説いた。

ただ、人が自由に生きるために「力」が必要。例えば、読み書きができなかつたら、そのことが原因で誰かに支配されてしまうかもしれない。夢があつてもそのためには高度な専門的知識や理論が必要となるかもしれない。勉強することの絶対的意味はないかもしれないが、あえて言うなら、「学ぶ=自由に生きること・自由になるため」となる。

『4 なんで学校に行かなきゃいけないの？』

⇒殺し合いはもうたくさんだ。（「自由の相互承認」の原理）

勉強するのは自由になるため。では、なぜ勉強する場が学校でなければいけないのか？主にフランスで活躍した哲学者ルソーは、皆が自由を巡り殺し合うような社会を防ぐためには、各々が対等で自

由な存在であることを、お互いに認め合う社会を実現するほかない（＝「自由の相互承認」の原理）という考え方を広めた。

そのためには「法」、「教育」、「福祉」の3つの核が重要。法により皆が対等で自由な存在であることをルール化して承認し合う。その実現のために公教育（＝学校教育）が必要となる。全ての子どもたちに対し、自由に生きるための力と相互承認の感度を育むことを促す。これが公教育の使命である。抽象的な話だがその原理を理解することで初めて次のステップ（具体策）に力強く踏み出せる。

⇒学校を、もっと子どもたちが自由になっていくための場にしたい。その自由を、お互いに認め合える場にしたい。（いじめ、キャラ化、空気の読み合いをどう克服できるか？）

現在、公教育がその使命を果たしているのか？もし不十分な部分があるならば、どうしたら良いのか考えてほしい。特に相互承認の感度については、「本当に育まれているのか？」と疑問に思う部分もある。いじめ、お互いのキャラ化、空気を読み合う人間関係などは相互承認の感度を育むどころか、逆に相互不信を招いてしまう。

学校の先生は教室を信頼と承認の空間にしなければならない。相互承認の感度の基底をなすものは「自己承認」であり、これがなければ他人を認めるどころか傷つけてしまう。時には裏切られることがあるが、生徒を信頼することを基軸として教育を行っていくことが大切。

また、人間の流動性を担保する仕掛けも必要。学校は閉ざされた空間（＝同じクラスのメンバーで終日過ごす）となるケースが多く、これもいじめの一因となる。クラスを超えて何らかのプロジェクトを行うなど、人間関係の流動性の仕掛けを作ると常に同じメンバーで行動しなくなるため、いじめなど起こりにくく。

⇒「自由になるための学び」を、より深く実感・達成できる学校にしたい。（学びの「個別化」「協同化」「プロジェクト化」の融合を）

現代社会を自由に生きるための力というものは日々変化している。かつては、言われたことを言われた通りに行う力が重視されたが今はそうではない。決められたことを決められた通りに皆と一緒に同じペースで行うのではなく、「学びの個別化」、「協同化」、「プロジェクト化」の融合を提案したい。時間の都合上、具体策は別の機会にお話しできれば思っている。

『終わりに』

現在、教育が大きく変わろうとしている。その変革の煽り、変化のダメージを子どもたちに与えてはいけない。これからも子どもたちにできるだけ良い形で教育を受けさせ、良い形で学校や教育を構想するための具体的な道筋を色々と提示していく。

本日こういう機会で皆様とお近付きになれたので、今後、熊本の教育を皆様と一緒に考えていこう。

第1分科会

演題：新しい教育のあり方～ICT教育の現状と展望～

講師：熊本県立大学総合管理学部情報管理コース 准教授 小蘭 和剛 氏

【講師紹介】



教育情報工学専攻。熊本大学大学院自然科学研究科博士後期課程システム情報科学専攻修了。八代高専情報電子工学科助教（2006年4月～2008年3月）、熊本県立大学総合管理学部総合管理学科講師（2008年4月～2010年3月）を経て現職。タブレット等を使ったeラーニングなどICT（Information Communication Technology：『情報通信技術』の意。）を利用することで、「伝達」、「解析」、「創造」の各段階において、知識（情報）が教育へどのように影響を与えるかについて研究を行っている。

【講演内容】

1-1 ICT (Information Communication Technology : 情報通信技術/情報コミュニケーション技術) を活用した教育の推進

平成26年6月24日に閣議決定された「世界最先端IT国家創造宣言」によると、政府は以下のスローガンを標榜し、来るべき情報化社会に備えるよう指針を示している。

- ① 2010年代中までに全ての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校において教育環境のIT化を実現
- ② 学校と家庭がシームレスでつながる教育・学習環境を構築
- ③ 家庭での事前学習と連携した授業など指導方法の充実を図る。

※ なお、佐賀県での先進的取組の事例をビデオ映像にて紹介。導入初期の現場での混乱や運用での創意工夫を行っていた。

1-2 ICT教育のデメリット

一方ICT教育は、「学習環境維持への労力が大きい」「学習者の理解が表面的なものになる」「導入・運用・保守コストが大きい」などのデメリットがある。

※ 韓国ソウルでの事例をビデオ映像にて紹介。2000億円超の投資でICT教育を推進したにもかかわらず、その教育への効果は投資の割に少なく、またタブレット利用に伴い読書量が減少した点などが問題となった。

1-3 ICT教育のメリット

またICT教育は、「多様なメディアを利用できる」「繰り返し学ぶことによる理解度の向上」「学習内容を生徒相互に共有し考え方の多様性を知ることができる」「より高度な知識の習得や教室では限界

のある資料が手に入る」などのメリットがある。

- ※ 広尾学園高等学校(東京都)での取組事例をビデオ映像にて紹介。同校は、ICT 技術を必要な個所に適宜組み込む形で導入し一定の成果を上げている。
- ※ MOOCs (大規模公開オンライン講座) に関するマサチューセッツ工科大学の取組とこれを受講したパキスタンの少女の事例をビデオ映像にて紹介。インフラの整備されていない発展途上国での飛躍的な知識層の掘り起こしに劇的な効果を上げている様子を紹介していた。

2 ICT を学ぶ教育

ICT 技術の進展は日進月歩であり、世界は当該技術の主導権を握るため、様々な対策を行っている。一方、我が国における ICT 教育については、上記「世界最先端 IT 国家創造宣言」によると、外国に後れを取っているというのが現状である。

- ※ ビルゲイツの個人資産は、約 10 兆円超。毎日 100 万円ずつ遣っても 2 万 7 千年以上かかるという。
- ※ オバマ大統領によるコンピュータープログラム教育の促進に関する演説をビデオ映像にて紹介。アメリカでも危機意識をもって対応している。

3-1 ICT の進展による教育環境の変化

ICT 技術の進展は、社会構造に大きな変革を來す要因となる。また当該変革により、詰込み型教育が見直され、『21世紀型スキル』が注目されている。つまり、「創造力とイノベーション」「批判的思考、問題解決、意思決定」「学びの学習、メタ認識（認知プロセスに関する知識）」などである。

- ※ 人工知能の世界的権威で発明家のレイ・カーツワイル博士がインタビューに答えている様子をビデオ映像にて紹介。博士は、2045 年の人工知能は、現在の約 10 億倍の性能を持ち、全世界の知能を遥かに凌駕するであろうと予言している。
- ※ またアメリカでは、弁護士業務の合理化のため、コンピューター（人工知能）が判決予想を判断しているという現状をビデオ映像にて紹介。弁護士の昇進や評価の判断ともなっているという。

3-2 ICT の未来とあるべき教育の姿

今後の教育現場においては、当該来るべき近未来の青写真を頭の片隅に置きながら、命題知から実践知、活用知への教育のパラダイムシフト、身近な家庭への回帰など教育の在り方を足元から見直す端緒として頂ければ幸いである。

- ※ コンタクトレンズ型のコンピューターにより現状認識情報収集を行ったり、脳に近いコンピューターチップを搭載したウェアラブル端末により、多言語翻訳や知識補助を行い、これまでのテストなどが無意味になる、などのビデオ映像を紹介。

【質疑応答】

Q：熊本県での ICT 教育はあるのか？

A：高森で事例があるようだが詳しくは伺っていない。

第2分科会

演題：「人と生き合える人に育てるために」

講師：くまもと心理カウンセリングセンター 代表 岡崎 光洋 氏

【講師紹介】



スクールカウンセラー、熊大附属病院総合診療部臨床心理士、熊大医学部講師、県教育相談専門員、県メンタルヘルス講座講師。専門は臨床心理学（心理療法、児童心理、医療心理、家族心理）。教育問題に関する講演や執筆多数。著書に「先生教えて！なぜ好きにしゃいけないの？」（講談社）、「現在の子育てこれで大丈夫！」（文芸社）。

『はじめに』

- 最近は、殺し合わなくていい人たちが殺し合っている。
- 男の子と女の子は成長の速さが違う。
- 思春期は、女の子で小4くらい、男の子は16、17歳。

～ テーマ ～

「対人関係力」

- 体を鍛えるというのはイメージが湧く。
- 心を鍛えるとは、対人関係の困難に遭遇した時に育つ。
- 一般的多数派は対人関係から悩みが生まれる。
- 思い通りにならない。
- 対人関係力をゆっくりゆっくり育てる場所が学校である。
- 学校の根源的な価値とは何かというと、学校が日本にあるということと、先生がそこにいるということ。
- 学校があるから子育てが成り立っている。
- 基盤は家庭 しかしバリエーションがない。
- 思い通りにいかないという対人関係が大事だと思う。
- 学校であることをトラブルと言わず、揉めごとと言ってもらいたい。

「学校の価値」・・・失敗していい場所、失敗すべき場所

- 対人困難体験・・・こまったなあ、むづかしいなあという日常であることを体験させてほしい。
- 一部に子どもに悲しいとか、怖いとか、不安だとか、嫌だとか思わせてはいけないかのよう思っている方がいる。
- 親も子どものとき、学校に行きたくないと思ったことはあるはず。

○学校は嫌な時もあるが、いやいや行くところに意義がある。

○困難を乗り越えて次に自信がくる。

○困難を取り除くと自己肯定のチャンスを逃す。

○達成感がある。

○家で行うのは無理。

↓

自己肯定感を育てる。

「親心」とは

○基本、心身の無事を願う。

↓

心配をする。

↓度を超えると

ハラハラ、おろおろ（過心配、過干渉）

↓

度を過ぎると、私たちが支えているんです！（傍から見ると・・・）

○困難を取り除く方・・・カーリング子育て。

○基本、子どもは望み通りにはならない！

○新しい人格を育てていると思うこと。

「対人関係力」

○お・・・幼い自己中（お父さん）

○か・・・構い過ぎ自己中（お母さん）

↓

基本、子どもに甘い！

適度に難に育てること。

○今の子はあったこともない人を友達という。

○ネットは遠くの人を近くにしたが、近くの人を遠くにした。

○P C、スマホを与えるときは制限をかけ、夜一定時間預かるルールがおすすめ。

○便利は人を育てない。

○困難は人を育てる。

① 揉めことを避けない・・・ある程度困難を。

② 気持ちは受け止める・・・できるだけ感じ取る。

③ 具体的に教示する・・・提案をしてあげる。

「わ・お・た・の・し・み・や・も・と・は」

○「わ」分かろうとする 分かってもらおうとする。

一方通行ではダメ 現実は分かり合い。

○「お」思ってほしいように思ってくれない。

誤解されてしまう。

○「た」 多様性と多面性を踏まえる。

こういう人もいる、こういうこともある。

部分否定の癖をつけさせる。全否定させない。

自分のことは多面的にとつてほしいが、他人のことは一面的にとつてしまう。

○「の」 ノーという言い方と勇気

苦手だからこそ学校に行って少しづつ練習してほしい。

優しい子は言い方が見つからない。

一回やってできなくてもいい。

○「し」 知り合う力

○「み」 見守る力

こんくらべ 後方支援（困難にぶつかったら、振り返ったら私たちがいるよ）

○「や」 やり過ごす力

過去を話し過ぎる、理解しすぎる。

将来をどうイメージするかで今の気持ちも変わる。

イヤなことがあつたら備えることがお薦め。

○「も」 もどす力

○「と」 時には戦い

不当なことが起きたら自己防衛、自己主張できる子にしましょう。

現実にはいっぱい戦いがある。

○「は」 反対の立場を想像する

つらいときは本心、本音を言ったほうが周りを楽にする。

《まとめ》

○学校がなければ子育ては成り立たない。

○学校と保護者は対等である。

Q&A

Q：苦手なことに対しての声かけはどうしたらいいか。

A：苦手があつていいと了解してあげる。

あくまでもあなたの最善を尽くせばいいと言ってあげる。

第3分科会

演題：ネット社会をかしこく生きる・豊かに生きる

～子どもたちに伝えたい7つの知恵～

講師：玉名市立玉名小学校 校長 戸田 俊文 氏



【講師紹介】

熊本県教育センター工学室長、熊本県教育庁政策課 指導主事（情報教育担当）、玉名市立鍋小・伊倉小校長を経て現職。日本教育学会会員。国立教育政策研究所共同研究員（情報モラル）。

熊本県青少年を取り巻く有害対策実行委員会委員。熊本県小・中学校情報教育研究会副会長。情報モラルや情報教育に関する論文を多数発表し、教材開発にも携わる。その他、学会発表論文、講演多数。

<概要>

現代は、携帯電話やスマートフォンを使い、インターネットやLINEなどを介して様々な情報を得ているネット社会であり、私たちの生活に欠かせないものとなっている。一方、子どもたちがこれらを通じていじめや犯罪の被害者になっているケースが多発し、こうした環境からどうやって子どもたちを守っていくのか、うまくつきあっていくのか悩んでいる親も多い。スマホができない私たち世代だからこそ、子どもたちに教えていける7つの知恵「3つの基盤力（ネット力）」と「4つの知」についてお話ししたい。

<はじめに>

現在、玉名小は教材としてタブレットを40台導入し、一人1台の環境を実現した。教科書と同じで使わないときは引き出しにしまっている。今のようなネット社会でなかった時代は、子どもたちに授業に臨む姿勢や相手の顔を見て話を聞くことなどを重視して厳しく指導していた。時代は変わったが、今も、人の話を聞く姿勢、必要なことは鉛筆でノートに書き留めることなど、基本的なことは変わらない。むしろ、今まで以上にこれらの基本を身につけておかないと、タブレットの活用は危ういものになると認識している。

<警察庁の資料から見る実態>

- ・出会い系サイト被害約1,400人、うち18歳未満約1,200人（平成16年）
- ・コミュニティサイト（SNS）被害約1,800人（小中高校が利用する無料ゲーム等）
 - うち18歳未満約1,400人（平成26年）
- ・つまり、被害者の7～8割は18歳未満の子どもたち。
- ・その一方で加害者は、18歳未満は少なく、大部分が成人である。
- ・ネット上のこういった課題は、私たち大人側の問題といえる。

<だから大人の出番が必要>

- ・子どもたちのネット上での文章の特徴は…「簡便、短文、单一的、直感的、記号的、速度重視」。これらと反対の概念の言葉を連想すると…「熟考、長文、推考、省察、振り返る、多様性、行間を読む」
- ・どちらがいい悪いではなく、バランス良く身につけたい。今の子どもたちは、前者に偏り過ぎていないか。
- ・後者については、私たち大人世代が得意としている。⇒子どもたちに学ばせたい。
- ・パソコンの画面やネットの仕組みは、現実のモデルを、仮想的に表現しているものが多い。たとえば、ワープロも紙に文字を書くという行為がモデルになっている。メールシステムもしかり。
- ・現実のモデルを知っていることが大前提。現実のモデルを知っているのは、私たち大人世代。
⇒子どもたちに学ばせたい。

<大人世代が子どもに伝えたい3つの基盤力（ネット力）>

※この3つの基盤力（ネット力）は人権尊重がその基本となる。

1. 表現力

- ・対面で話す言葉（対面型コミュニケーション）は、相手の表情や口調や姿勢までが情報として伝わる。
- ・通常のメールなどの非対面型では、言葉に付随した情報のほとんどが削ぎ落とされてしまう。そのことが分かり合った上で、メールのやりとりをしないと、気持ちのすれ違いや、思い込みで、齟齬が生じてとんでもないトラブルやいじめにつながるおそれがある。
- ・だからメールでは、非対面型コミュニケーションで削ぎ落とされていく情報を補完するだけの表現力が求められる。それが、難しいのならメールは「気持ちが伝わらない」という理解の下で使用する必要性がある。

2. コミュニケーション力

- ・従来：自分－家族－近所－一番外側に知らない他人、といった人間関係（距離感）。少しづつ、より外側の人とコミュニケーションを取る方法を、時間をかけて学んでいた。
- ・現在：一番外側にいる他人とダイレクトにつながる（スマホやネット）。ある意味、トラブルが起きるのは当然という側面がある。
- ・だから、私たち大人が、子どものコミュニケーション能力の状況に応じて、スマホの使用などをコントロールしなければいけない。
- ・人間関係（距離感）を認識する、コミュニケーション力が非常に大事。これは、経験がものをいう世界。つまり、大人世代が得意とする領域。

3. 想像力

幼い頃にスマホなどの仮想現実の遊具を与え過ぎる、実体験を基にして育まれる想像力を育てる機会を減らしてしまう。

4. 3つの基盤力を育てるには

① 表現力

- ・本（それもその子にとっての良書）をたくさん読む。
- ・周囲に正しく説明できる力をつける。

② コミュニケーション力

- ・基本は礼儀（あいさつや返事など）
- ・ルールを守る。（ルール無用の世界ではコミュニケーションは成立しない）
- ・他人を気遣うことのできる心を育む。
- ・ものを大切にする、目を見て話す、など。

③ 想像力

- ・実体験が想像力の源になる。たくさんの経験をさせて欲しい。

④ 注意深くみると

- ・上記の事柄を注意深く見てみると、スマホやネットなどとは無縁の内容。
- ・つまり、スマホができない私たち大人世代だからこそ、子どもたちに教えていける。

<4つの知恵>

1. フィルタリング

- ・有害情報や悪意のあるアプローチから子どもを守るために、フィルタリングは必須。

2. 匿名はあり得ない

- ・ネットは様々な中継機を通じて利用⇒その都度記録されている。

3. ネットは公共物

- ・ネットを使っているときは、パジャマを着ていてもよそ行きの振る舞いが求められる。その認識を強くもたせたい。

4. お手軽、ライトさに注意

- ・「いいねボタン、ツイッター、ツイキャス、LINE、ミックスチャンネル…」これらに共通するのは、「お手軽、ライト」であるということ。
- ・今後も、想像もつかない新しい技術やサービスが生まれる。それらが普及するためには、誰もが使えるような「お手軽、ライト」であることが絶対条件である。
- ・この手軽さに安易に飲み込まれないようにする「力」を今のうちにつけておく必要がある。
- ・その力こそが「熟考、長文、推考、省察、振り返る、多様性、行間を読む…」こと。
⇒力をつける、ブレーキを掛けることができるようになら。

<まとめ>

今回のテーマにした「豊かに生きる」には、特に3つの基盤力（ネット力）が大事。この基盤力は私たち大人が身に付けている力、私たち大人が得意とする力である。

それに4つの知恵を加えて、ネット社会をかしこく生きる子どもたちを育てていきましょう。

第4分科会

演題：「食育が子どもの未来を拓く」～かしこく元気な子を育てる！食環境～

講師：山東こども園 園長 村上 千幸 氏



【講師紹介】

社会福祉法人喜育園 山東こども園園長。一般社団法人食育・口腔育成支援センター（主席研究員）。NPO法人子どもとメディア認定 メディアインストラクター。日本子育てネット事務局長。著書に、「食育が子どもの未来を拓く」（エンタイトル出版）「かしこい体の教科書」（ライフマイルエージ研究所）。

○国果をご存じですか？

柿は国果・・・柿の効能について

柿というのは昔から「日本にある、伝統的なくだもの」

→最近は皮をむかなければいけないから面倒くさい子ども・家庭が増えている。

○暮らしの中で育つ子ども

自分たちが食べることに関わることが大切。

→それが食育

★子育て＝口育て

・三人寄れば文殊の知恵 → 三人寄れば糖尿病

・外食は害食

・地味弁当

「食い改めなさい」

○おばあちゃんの知恵

・子育て支援センター事業「お正月の準備」での話

一様々なことに伴うさまざまな事柄が大切

からしレンコン作り・・・からしレンコンを作る過程での味噌造りや、片付けなどに関わって

いくことが大切

健康の三要素

1. 子どもが育つということ “う” “え” “き”

“運動・栄養・休養”

(動く) (食う) (寝る)

生活リズム (快眠・快食・快腸)

2. “う”的こと 運動 (遊ぶ子)

○運動器の不全

(H26.4.23 NHK クローズアップ現代より)

子どもの体に異変有り

- ・統計結果より
- ・運動機能の低下により、子どもたちの怪我も多くなってきている。
- ・子どもたちの発達不全
- ・学校での熱中症が7年で倍になっている。
- ・旧スポーツテスト・・現在のスポーツテストと内容が異なる。
- ・走り幅飛び、懸垂、垂直跳び、背筋力、立位体前屈ができなくなってきたいる子どもが増えてきている。

○学童期の課題

乳児期・幼児期→空白の時代 ブラックホール 何かが起こっている！

○子どもの発育パターンを知る！

情緒の発達もある。それぞれの時期にあった発達。

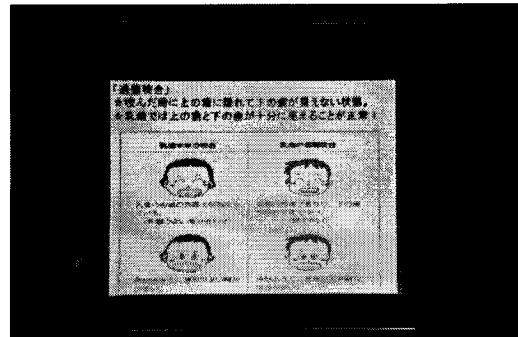
寝る子

○子どもが寝る時間の国際比較について

- 睡眠が少ない子どもたちが多い。
- 寝起きが悪い子が2割いる。

○子どもたちの心の状況

慢性的疲労を感じている子どもたちが増えている。
こどもは365日早起きの生き物。



3. “え”のこと 栄養（食べる子）

○口腔の発達について

- 発達していない子どもが増えてきている。
- ・食べるための構造が発達していない。できていない子どもが増えている。
- ・被蓋が発達していない子ども → 運動能力が発達しにくい子どもがいる。

○顎を育てる

- ・顎への負荷 → かみしめ

○味覚の異変 3人に一人

- ・味覚を認識できない子どもが増えている。

○子育ての落とし穴

子育て便利グッズが要因で子どもたちの体の発育や発達に影響が出てきているのではないか。

Ex)マグカップ、ストロー付きの水筒

○舌が上手につかえない子どもが出始めている。

4. “き”のこと（休養）

「適切な刺激によって機能が向上し、その機能を繰り返し刺激することによって構造が確立する」

○毎日排便する子どもが減ってきてている。

- ・毎日排便できない子どもが4割程度いる。
- ・年齢が大きくなると子どもの排便を気にかける親が増えてきている。
→深刻な問題である。
- ・保護者の便秘に関する意識が低い。
- ・大人の腸になるまでは、親が一緒に育てることが大切。
- ・便秘に対する思い。「毎日排便できる快感を身につける」
→育てなければ育たない。

○「啼くこと定まらざるして、乳を飲ましむることなけれ」

○赤ちゃんの認識能力

親子間の視線は社会的認知発達の基盤



5. 食卓が家族をつくる

○こ食（孤食から個食へ）

○「かかわり合い」を食べる食卓

→子どもたちの自我が食卓で育っていく。

一生の価値観になる育ちそのものである家族の文化を伝えるセンス 態度 处理感覚

○食卓と社会的個の確立

「人間は共食をする動物である」

○家族での食環境

子どもたちがリズムよく生活をし、食欲を感じることが大切。

6. 思春期に花開く子どものために

～家族になること～

○主観的幸福の構造的神経基板

幸福を感じる育ち

→小さい頃からの快感・経験が大切。

→それらの経験は脳を育てる。

心地よい体に育っていくことが大切 快食 快便 快眠 ⇒ 子どもたちが・・

★曲の紹介 「清流」 中島みゆき

さまざまな家庭があるが子どもたちに・・・



★亭主関白協会

『 非勝三原則 』

“勝たない”、“勝てない”、“勝ちたくない”

笑顔(*^o^*)が大切！子どもにとって家族は大きな源。家族を作るのが食である。食を作るのは家庭を作ることにもなる。

食欲を増やすためには、家族の笑顔を増やす。

アンケートより

以下は、各講演の感想文等を掲載いたします。

全体会

演題 「勉強するのは何のため？」～教育（の未来）をテツガクする！？～

講師 苦野 一徳 氏（熊本大学教育学部講師）

・教育とは、すべての子どもが自由に生きるため、生きたいように生きるために力を育むことだという話を聴き、共感しました。

・子ども以前に、自分が、教育とは何のためにあるのか、あらためて考え、知ることができました。

・遅いかもしませんが、私も今からでも自由に生きるために勉強したいと思いました。

・大変おもしろい講義でした。多面的に、でも本質的に教育について考えることができました。自分の中に落とそうと、脳みそをフル回転しました。

・教育の場での「信頼と承認」「人間関係の流動性の仕掛けをつくること」はぜひ実現させていただければ、と思いますが、まずは家庭を「信頼と承認」の場にすること、「人間関係の流動性」を実現できるために働きかけを家庭から行っていこうと思いました。

・生きる力を育むという観点で、教育現場の力は子どもたちにとって、とても大事なものであると改めて感じました。本日の講演を、市PTAで行われ、活かしていかれるという方向性であるならば、市の教育に安心できると感じました。

・できるだけ多くの人が納得できるいい考え方を見つける・・・という考え方には、ぜひ子どもたちにも身につけてほしいな、と思いました。

・「それが自由に生きたいのであれば、全員が対等な存在だと認めよう」など、さっそく今日、子どもたちに話したい

・法によって、すべての人類が自由を認める「ルール」は大切だと思いました。

・「閉鎖的な空間から、イジメが始まる。流動的な空間では起こらない」という話になるほど、と思いました。

・公教育の意義を感じることのできる講演でした。

・真理はわからないけれど、真理とは何かを考えながら生きていくのが人生なのではないかと思いました。

・一般化の罠や問い合わせのマジックは、現場でとても大切で、意識しておくだけでもためになります。また、クラス単位に変化を入れていかないと学校はもたない。流動性というヒントは大切である。

・「自由の相互承認」を築くため、まずはひとりひとりの子どもの自己承認、自己肯定感を学校あげて育んでいきたいです。

・哲学のキーワードをこれだけわかりやすく、面白く聞けたのは初めてでした。カントやニーチェがどう教育につながっていくのかと思いましたが、すべて結論に結びついていて、とても興味深かったです。

- ・私が漠然と考えていたことを、言葉にしてもらったようでとてもスッキリしました。
- ・ぜひ、単Pや区Pにお迎えして、またお話を伺いたいと思いました。
- ・二部構成で二時間くらいの時間が欲しかったです。
- ・いつも、最後は答えが見つからないような講演会が多い中、勉強するのは何のため=自由になるため、と子どもにもはつきりと言える答えを頂けてうれしかったです。哲学なんて・・・と思っていましたが、もう一度、考え方ねばならないようです。「どうせ」と言わないよう努力し、子どもを信じてみようと思いました。
- ・哲学はあまり好きではありませんでしたが、面白いな・・・と感じました。苦野先生の哲学への情熱は素晴らしい、微笑ましいと思いました。
- ・熊本にこんな有名な先生がいらっしゃるとは知りませんでした。とても楽しい講演でした。哲学は面白いんだと、初めて知りました。
- ・話の後半、とても興味深かったです。特にいじめに関して人間関係の流動化・・・という話をもつと聞きたかったです。
- ・ある雑誌に（クレジット付きで）勉強するのは何のためか？という記事で、人生を歴史に例えて、教育は、その歴史を切り開いて進むための道具だ、とあり、なるほど、と思ったのですが、先生のお話も、本質は一緒かな、と思いました。
- ・教育（勉強）だけでなく、生きる意味など、哲学的な考え方から聞けて、非常に良かったです。
- ・時間が足りなかつたことが、非常に残念です。もっと聞きたかったです。
- ・民主主義社会の根幹となる学校教育の根本原理についてお話を聞けたと思う。
- ・とても興味深かったです。なぜ、勉強するのか、一般的な答えがあるんだろうと思いましたが、先生のお話を聞いて、本質がわかった気がします。私が今まで思っていたのは、「一般化」にあったと気づかされました。スケールが大きく学べたことで、もっと自由に子どもの未来を広く見られるようになったと感じています。
- ・教育とは、の課題に入る前に、その前提となる伝え方、歴史を多岐に渡って話された。さすがに哲学者だけあり、本質をつきつめていかれるところが興味深かったです。楽しく聞くことができました。
- ・「自由になるため」この言葉は分かりやすい。子どもには、「短い言葉でわかりやすく」が一番伝わると思っているので、参加できてよかったです。
- ・すべてにおいて「そもそも何のため？」があるのだとよくわかりました。考えることは苦痛ではなく、楽しいことだと思いました。
- ・勉強するのは何のため？と子どもに聞かれても答えられなかったが、今回、苦野先生のお話を聞いて、子どもがこの先自由に生きていくための方法や知識を学ぶためだと分かった。哲学によって、考える力が身に付きそうだ。

第1分科会

演題 「新しい教育のあり方」～ICT教育の現状と展望～

講師 小薗 和剛氏（熊本県立大学総合管理学科准教授）

・ICT教育が推進される中で、ICTは最終手段くらいの気持ちでよい、教育課題の本質を知って、必要なところで使っていく、という話を聞き、今回の研究大会のテーマ「温故知新」に沿ったお話の内容だったなあ、と思います。

・ICT教育には、効果的な場合と、そうでない場合があることが、よく理解できました。今までどおり努力を重ねられるところと、興味関心を深めるところでの使い分けが大事なんだなあ、と思いました。

・人工知能には驚きました。これから将来、何が大切なを見極めないといけないな、と感じました。子どもがふれるITに関心をもっていきたいです。ICT教育のいいところだけ活用できるといいと思いました。

・ICT教育が推進されているが、問題も多いことがわかりました。

・子どもたちの教育環境も変化していくと思いますが、ICTの可能性を感じました。

・私たち親世代には、難しいところもあるので、現状とこれからどのようになるのか知ることができました。

・ICT教育のメリット、デメリット等、くわしく話を聞くことができた。将来的にどこまで進化するのか、なんだかこわくなりそうです。

・ICTをすぐ導入ということではなく、課題の本質を見極め、改善を助けるツールとして利用することが大切であると感じた。

・とてもよかったです。映像の活用も効果的でした。ICTの功だけでなく、罪を話されてバランスが取れていました。

・教育の今、を考えるだけでなく、10年後、20年後・・・ずっと将来の姿を見据えながら、ICT教育を考えいかねばならないと感じました。子どもたちが大人になったとき、その子どもたちが・・・世の中がどうなっているのか想像できないが、不変的なものもあると思う。そこをしっかり核としていくことが必要なのではないだろうか。

・映像資料を多数準備して、現状と課題を分かりやすく提示していただき、考えさせられました。現実の子どもたちの力をどう育んでいくか、ツールの最適活用を工夫していく必要があると思います。

・自分に一番離れた分科会を・・・と思い受講しました。難しい話かと思ったら、とても身近な話で、他人事ではないな、と感じました。たった30年で人口知能が超える世界・・・怖いな、と思いました。

・近い将来、今の私たちの仕事がなくなるとき、私たちの生活はどうなるのでしょうか。

・ICT教育はよく知らなかったのですが、技術の進歩に驚かされました。

第2分科会

演題 「人と向き合える人に育てるために」

講師 岡崎 光洋 氏 (くまもと心理カウンセリングセンター代表)

- ・岡崎先生、いつもありがとうございます。とっても子育てに役に立つ話ばかりです。
- ・岡崎先生のお話は、2回目で、今回も楽しみにしておりました。笑いありの漫談ながらのお話でわかりやすく心に響きました。
- ・何度も同じ講演を聞いているが、岡崎氏の話は同じ内容でもおもしろい。
- ・1時間があつという間でした。ぜひ、うちの学校でも講演していただきたいです。
- ・さすが、岡崎先生！という感じです。時間が足りない！こういう機会にはこれからもぜひ、岡崎先生はマストのご参加を！
- ・大変おもしろく、ひきつけられた。こんなに笑った講演会は初めてです！3回目とのことで、選ばれた方の気持ちがわかります。もう一回聞きたいです。
- ・岡崎先生のお話は、名人芸。何度聞いても、その時自分に必要であるお話を聞けるので、とてもよかったです。謝辞もすばらしかったです。
- ・岡崎先生のお話をずっとお聞きしたいと思っていたので、今回の機会を作ってくださった市P T A関係の皆様にも深く感謝申し上げます。
- ・ユーモラスな語りの中に、人間として生きる上での根幹を教えていただきました。
- ・今日のお話を、子どもたちにも聞かせてあげたいです。子ども向けの講演会をお願いします。
- ・困難さが人を育てる。その困難を取り除くのではなく、保護者は後方支援する大切さがよくわかった。
- ・学校は、困った、しまった、いやだ、なぜ、これを経験していい場所。いやいや行くことに意味がある。もめごとを体験すべき・・・などなど楽しく聞けました。
- ・物事のとらえ方、返答の仕方で事態はいいほうにも悪いほうにも向くということや、子

どもに対してはもちろん、自分自身にも、考え方、気持ちの持つべき方を教えていただきました。

- ・親としてハッとさせられました。子どもを思っていたはずのことが、親のエゴだったと気づかされました。「困難があるからこそ成長がある」本当に勉強になりました。
- ・失敗をさせるプロセスが大事。構いすぎず・・・わかっていたのですが・・・なんだか自分の子どもへの接し方を思い出すと笑えます。先生に全部見られていたようで。親として悩んでいたことも乗り越えて成長するチャンスですね。
- ・自分自身、子どもに構いすぎる過心配、過指導な部分があり、反省、見直しが必要だと感じています。「適度に雑に」を心がけて子育てしていきたいと思います。
- ・過指示症という言葉を初めて聞きました。自分にも思い当たる所があります。後ろから支える母を目指したいです。
- ・子どもに、無理やり、矢張り早に質問していたことを深く反省しています。
- ・心配は支配になっていないかという言葉にハッとさせられました。カーリングの子育てではなく、いい意味で雑に対人関係力を育てていきたいと思います。
- ・「困難が大事。でも親がそれをいけないことと思っている」という言葉にはハッとさせられました。学校に任せる姿勢を持ちたいと思いました。
- ・学校は「対人関係力を育てる場」。対人関係力を育てることが、とても大切な要素であることがよくわかった。
- ・対人関係を育てるために多面性、多様性ということを子どもに伝えたいと思いました。
- ・「対人関係力」とは、子どもたちだけでなく、今の大人にも必要な要素だと思います。多様性と多面性を対人関係に認めると生き方が楽になるかなあ、と思いました。
- ・うちの子はいじめにあっていました。親子共にとてもつらい日々でした。今回のお話は、とても勉強になり、心に沁みました。個人的にもっとお話を聞きたいな、と思いました。
- ・子どもとの関わりについて、悩むこともありますが、先生のお話を聞いて、気持ちが楽になった気が楽になった気がします。

第3分科会**演題 「ネット社会をかしこく生きる・豊かに生きる」**

～子どもたちに伝えたい7つの知恵～

講師 戸田 俊文 氏 (熊本県玉名市立玉名小学校 校長)

・現代の目まぐるしく変化するネット社会において、コミュニケーション力、想像力が発達段階の子どもたちに何の教育もせず、スマホを与えてしまうのは、あまりに軽率なことだと改めて感じました。

・相手の気持ちを考えること、人の話をきちんと聞くこと、きちんとあいさつすること。まずは、私たち大人ができていないことを反省し、実践し、そしてそれを子どもに伝え、一緒に良い環境を作ること。難しいですが、子どもを守るために必ずしなければならないと思いました。

・ネット社会の基盤は超アナログであり、今も昔も変わらない日本人のモラルを大切にすること、表現力、想像力の大切さ・・・。今後、子どもたちへの教育にいかしていきたい。

・子どもにスマホを持たせているので、もう一度改めて、スマホの使い方について話し合いたいと思いました。

・優しそうな校長先生。様々なお話の奥に「愛」と「優しさ」が溢れているように思いました。

・相手の顔が見えないため、どういう雰囲気でやりとりしているか、情報不足で誤解が生じやすいということがよくわかった。

・子どもが接するネットの情報量についていけずにどう関わっていけばよいのかわかりませんでしたが、アナログでも、しっかり向き合っていけば子どもに伝えられることはいっぱいあることがわかりました。できることから積み上げていきたいと思います。

・単純に「ネット=悪」という話ではなく、とてもよかったです。

・「豊かに生きる」の観点を子どもに伝えていきたいと思います。

・子どもの経験値が大事なので、現実社会が大切だと感じました。いかに現実社会で豊かな表現力を持つかが大切と思いました。

・ぜひ、本校で子どもたちにも話してほしいです。

第4分科会 演題 「食育が子どもの未来を拓く」～賢く元気な子を育てる食環境～
講師 村上 千幸氏（社会福祉法人喜育園 山東こども園 園長）

- ・私たちが子どもの頃はあたりまえだった、「あそぶ」「たべる」「ねる」がとても大切だと、改めて考える機会になりました。親が子にしてやれることは、それをいかに整えるかだなあ、と感じています。
- ・何を食べるかもとても大切ですが、実は、どんな環境で食卓を囲むかが一番大切なこということがわかりました。
- ・食べることも、運動も、とにかくさまざまな経験が、子どものさまざまな部分を育てる。色んなところに連れて行ったり、みんなで食卓を囲んだりといった、自分の親が当たり前にしてくれていたことを、私は子どもにしてあげているかな・・・と反省しました。
- ・食育は、栄養面や、メニューを考えるだけでなく、健康でいることや、家庭というものを考えることだということに共感しました。子どもを育てる上で、家庭や環境を考えることが大事。そしてそれが食事につながり、食育になる。体の健康、心の健康、みんなが笑顔でいられる、そんな日常を作つていけたらと思います。
- ・食事の内容だけでなく、誰と食べるか、どう食べるかもとても大事などと、あらためて気づかされました。これからも毎日の食事を大切にしていこうと思います。
- ・子どもを守るためにすることが、かえって発育の妨げになることや、運動の大切さなど、私が乳幼児を育てる前に聞いておきたかった話だと思いました。
- ・昔はあたりまえだったことが、今は難しくなっていることに驚きました。忘れていた、自分の子ども時代の習慣や行動を一緒にやってみたくなりました。
- ・食というのは、人間の基盤になるのだな、と思いました。みんなで笑顔のある食卓を囲みたいと思います。また、子どもと一緒に作つて食べる日を設けたいと思います。
- ・子育て中のお母さんにも、「今、がんばって」と励ましていきたいと思います。
- ・園長として、ご自身が取り組んでおられる事例や、たくさんの数字的データを紹介してくださり、子どもたちの「体」の現状を解説してくださり、とても勉強になりました。

平成 27 年度 教養委員会

【担当 中央区P】

代表幹事（市P副会長） 楠本誠二（藤園中） 教養委員長 宮崎 紀男（西山中）
教養副委員長 岡田行雄（帯山西小） 市P担当常任理事 阿久根祐子（帯山中）

【教養委員会担当 31 単P】

中央区：幸野 雅子（藤園中） 奥村 嘉宏（西山中） 佐藤 玲奈（帯山西小）
宮之前和男（黒髪小） 新富 浩之（白川中） 廣瀬 修（出水南中）

東 区：緒方 新諸（健軍東小） 吉村 匠博（託麻南小） 尾形 直美（桜木東小）
中川由美子（二岡中） 橋口奈津子（東部中） 山田 豊（尾ノ上小）

西 区：山口 由正（松尾東小） 古谷 千鶴（松尾北小） 坂本 卓也（小島小）
小山 智子（中島小） 角野 薫（城西中）

南 区：中村 修（日吉小） 奥畑 雅範（御幸小） 宮里 淳一（田迎小） 濱 和代（田迎南小）
志柿 雅子（日吉東小） 長 亨（田迎西小） 山口 潤（託麻中）

北 区：井上 敏郎（龍田小） 益田美由紀（龍田西小・分離校予定） 宮原 早美（城北小）
前田 啓史（植木小） 福盛 勝明（桜井小） 西とみよ（北部中） 一安 浩文（五霊中）

①

熊本市 P T A 協議会事務局

〒860-0843 熊本市中央区草葉町 5-1 中央公民館 2F

Tel 096-356-1122 Fax 096-351-2309

H P <http://www.kumamotocity-pta.net>

E-mail info@kumamotocity-pta.net